

ルソーにおける異常性格と創作の原動力

篠田 知和基

はじめに

ジャン＝ジャック・ルソーは一七二二年ジュネーヴに生まれ、間もなく母をうしなう。その後、叔母のシュザンヌにそだてられる。兄がいたが、行方不明になっている。一〇歳の年、父がジュネーヴを去り、新教牧師ランベルシエのもとにあずけられる。その後、叔父のベルナールのもとに住み、市の登記官の見習い、時計職人の見習いなどをし、一六歳の年、すべてをなげうって、ジュネーヴを去り、放浪の生活にはいる。三八歳でディジョンのアカデミーの懸賞論文に当選、以後、文筆の生活にはいる。五〇歳の年、『エミール』を発表、評判になるが、その内容が体制の忌避にふれパリ高等法院ほかの逮捕状がでる。以後、友人たちとも別れ、各地を転々としながら、迫害妄想に悩まされる。一七七八年死去。

ジャン＝ジャック・ルソーはわけもなく涙を流す憂鬱症と、

好んでめまいの感情をかき立てて、恐怖感に一種のマゾヒスティックな喜びをかんじる性格をもっていたが、それらを『告白』その他に書き表すことによって、そういった異常性格を克服しようとするところがあつた。晩年には被害妄想が高じて『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』⁽¹⁾などの著作で、自己弁明をしようとしたが、彼の創作は、『告白』においてもそうであるように、自身の異常性格を自ら自覚してそれを弁明するとともに、書くことによって、その症状を克服しようとする意図があつた。彼の告白、そして、創作における異常傾向からの脱却という創作動機が、作品にどのようなあらわれているかをみよう。

症状

一九世紀のネルヴァル、モーパッサン、二〇世紀のアルトールなど、重篤な精神疾患を持っていて、精神病院に収容されていた作家と違って、一八世紀のジャン＝ジャック・ルソーは、それほど異常な精神症状はみせなかったようだが、クレッチマー⁽²⁾やロンブローゾ⁽³⁾によつては、狂気に陥った天才とされている。すくなくとも『告白』後半以降の晩年の作品によるかぎり、彼の周りに陰謀の網がはりめぐらされているという被害妄想に悩まされており、スタロバンスキーによれば、古典的

な迫害妄想のパラノイアということになる⁽⁴⁾。事実、彼は、長年の友人であったデイドロまで、彼の破滅を工作しているものとみなすようになっていた。それがどこに原因するものかパトグラフィックに検討してみると、何でもないことで涙を流す憂鬱症、ちょっとしたことで有頂天になる双極性疾患が顕著にみられるうえに、若くして家を飛び出して、放浪してあるいた青年時代の不安定な生活⁽⁵⁾、音楽教育をうけたこともないのに音楽教師を務めたりしなければならなかった生活の不如意、要するに落ち着いた家庭生活をしらなかった生活環境が彼の異常な性格の形成に寄与していたとみられるとともに、執筆活動をはじめてからは、きわめて論争的なテーマと表現で、学問芸術論、教育論、社会契約論などを次々に書いて、そのつど保守的な論壇と読者層のあいだにスキャンダラスな反応をひきおこし、禁書となったり、パリの高等法院から逮捕状がでたり、ジュネーヴの市民権をはく奪されるとか、サン＝ピエール島のように、退去命令をうけるといったトラブルを経験し、友人との関係でも淡白な交友関係を維持する代わりに、過剰な依存感情をもち、それにたいして十分な反応がないと裏切られたように思い、それを『告白』などで公表することで、じっさいに友人たちに背をむけられるようなことがあった。晩年のルソーは友人たちに背かれ、庇護者からも見放され、書けば書くほど異常な感情世界に引きずり込まれる状態におちいつていた。そ

うなると自己の「病態」を客観的に分析するというつもりで書きだした『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』におけるように、その異常性を自ら暴露するようにさえなった。もっともその「分析」はネルヴァルにおけるような自己分析ではなく、対社会的な人間関係の分析で、個人的な異常性の分析にはほどとおく、熱に浮かされたような自己弁護に終始するものになっていた。最後はドクニンジンの汁を飲んでの自殺であるという伝説も生じた。身体的には尿道結石に終生なやまされており、健康状態は必ずしも良好ではなかった。もう一つ彼の異常性については、露出狂傾向が指摘されている。『告白』でも些細な過ちをさも重大な罪であるかのように書き立てるところがあるが、その反面、性的露出症については、それらしいところでも婉曲な言い方に逃れているようにみられるところがある。若い娘たちがとおるところで、「みだらな」姿態をみせるといった記述には、もう一步ふみだした「告白」が必要ではないかという疑いもあるのである。が、これは『告白』の表面的な叙述では隠ぺいされているようである。

書くことの意味

ここでは、実際に『告白』と『孤独な散歩者の夢想』に記述された出来事と感情とをもとにして、ルソーの異常性と、書く

この意味をさぐってゆく。書くことは、告白であるとともに自己分析であるはずだが、隠いであるとともに自己弁護もあり、書くことで病気から解放されるとともに、書くことが新たな嘘をかさねているという自責の念、自己懲罰の表現でもあるだろう。

まずかれの若年のときからの異常傾向を『告白』によってみてみよう。

「平生は臆病で、従順なくせに、感情が激すると、熱し、高ぶり、手がつけれなくなる。『告白』、――、p一九

「感じたのは、憤怒と激怒と絶望だけであつた。p二〇

「私には非常に激しい情熱があつて、その掻き立てられている間は、まるで手が付けられず、自制心も、体裁も、心配も、礼儀もあつたものではない。無知、厚顔、狂暴、不敵である。

恥辱も構わず、危険もおそれない。p三三

ジュネーヴを出奔したときも、一時の激情に従つて、無反省に行動した結果だろう。

思慮分別、計画性はとぼしかったのではないだろうか。懐中には食事代ももっていなかった。旅費はひたすらあるいていたので、費用は掛からなかったが、食事と宿泊には、行き当たりばったりの家々で世話になるしかなかった。その時の気持ちを彼は次のように書いている。

「恐怖のあまり逃亡を企てる氣になったときはひどく悲し

かったが、それを実行したときは、それだけ楽しく思われた。まだ少年の身で、国も、縁故も、支持者も、資力もすて、くらしていきけるだけの職業も覚えないうち中途半端のままで徒弟をやめ、抜け出す手段も知らないで恐ろしい不幸の中に身をゆだね、弱い、世間知らずの年頃で、悪徳と自暴自棄とのあらゆる誘惑に身をさらし、今まで耐えることのできたよりはるかに執拗なくびきをかけられて、禍と過失と落とし穴と隷属と死とを遠くへ求めに行く、それがまさに私の路もうとする道であり、当然直面しなくてはならない前途であつた。p四四

その後、用があつて、いったん逃げ出したジュネーヴへ立ち寄ることになったときには、万感胸に迫つて感涙にむせぶといった風情だった。あまりに感じやすい少年だったのだ。

「橋の上にくると、気分が変になりかけた。いつだって、感動の激しさからくるある種の失神を覚えることなしには、この幸福な都市の城壁をながめ、そこをはいっていったためしはない。p一四三

そのジュネーヴからのちには追放されるのである。ジュネーヴに対する感情もアンビバレントなものだった。かれには二重性があつたのだ。

「私が性格の全く反対な別人に見聞違えられるほど、自身に似なくなるようなときがある。p二二七

「私には時に自分が自分でなくなるような、不可解な錯乱の

瞬間がある」。p 一四七

このような二重人格を疑わせる性格について、マルセル・レモンが引いた文章ではつぎのようなものがある。

「一方の魂では私は賢明に氣違いとなり、もう一つの魂では氣違いじみて賢者となる。もっとも、一方では狂氣が賢明さより優勢であるが、もう一つの場合、自分で賢者だと思っている週でも、狂氣が明らかに優位をしめている」⁽⁶⁾。

またこんな性格もあった。

「私が断崖絶壁を好むわけは、特にそれがめまいをおこさせるからなのである」。p 一七二

一種のマゾヒズムでもあろう。

と同時に彼は熱病の発作におそわれることもあった。そんな状態でいくつかの作曲をした。

「ああ、もしも誰かが熱病者の幻想を書き留めることができたら、そのうわごとから、時としてどんなに偉大な、崇高なものがでてくるかを知ることだろう」。p 一九二

その時は音楽だったが、しばらくあとでは文章になった。

「私の狂氣から引き出された最上のもの」 p 四三九
というのが『新エロイズ』である。

迫害妄想

その一方で、「陰謀」が進行していた。

「そんな組織の最初の現れをドルバック党の陰險な非難をとおしてかんじとった」。p 五〇二

彼を招いてエルミタージュに住まわせてくれたエピソードも退去をもとめてきた。

「一度運命が一人の人間を不幸へ導くときには、このようにすべては運命の仕事に協力する」。p 五二五

陰謀の大本は『エミール』だったようである。その大胆な宗教思想が、逮捕にまで発展した。あとはデイドロラ、かつての友人たちが彼にそむいて、誹謗中傷をかさねたようである。それが彼の終生の妄想になる。

「たちまち私の想像はいなづまのようにひらめき、一切の不正の秘密が照らしだされた」。p 五七八

「ここに闇の仕業が始まる。八年この方私はこの闇に包まれていて、どんな手段を尽くしても、その恐ろしい暗黒を見通すことはできなかった。不幸の思念に沈められ、そこで私に加えられる攻撃の鋒先を身に感じ、その直接の武器を認めながらもそれを操る人間の手も、その人間が用いている手段方法も見ることができないのである。汚辱と不幸とはまるでひとりて来

るかのように私の身に降りかかるが、それがどういうことかははっきりしない」。p.六〇一

パリの高等法院とジュネーヴの市会の逮捕状がでた。

「右の二回の令状が合図となって、ヨーロッパ全土にわたり、かつて類例のない凶暴さで、私への呪詛の叫びがあげられた。

あらゆる雑誌、あらゆる小冊子がこの上もなく恐ろしい警鐘をうちならした」。p.六〇三

悪い夢

その「狂気」はむしろ「悪い夢」のようなものだった。「ルソーの狂気は、われわれにあらゆる接近が絶たれ、手の届かないほどに別の地平に後退している精神分裂病に比べればずっとはるかに不可解なものではない」。スタロバンスキー『透明と障害』p.三二七

「ジャン・ジャックを狂気の道程に従って追跡することは可能でもあれば必要なこともある」。同上p.三二七

「ジャン・ジャックは決して覚めることのない悪い夢の中で生きていると感じている」。同上p.三二八

ルソーは迫害妄想からのがれるために『対話』（『ルソー、ジャン・ジャックを裁く』、以下『対話』とする）。や『山からの手紙』を書いた。しかしそれは、妄想をより強固にすること

にしか役だたなかった。『告白』においては、軽度の妄想を展開し、それにこだわらない姿勢を示して、読者を安心させる。

『対話』では、妄想が固定観念になっていることをしめしており、妄想にのめりこんでいることがあきらかである。ここでは書くことによって、妄想が固定するのである。

迫害ではなくとも悪意、中傷、無理解が彼の周囲にあったことはある程度たしかだろう。それに対して躍起になって、反駁を書けば書くほど世間は反発し、あるいは彼から距離を置こうとする。告白や夢想はかなり公平な自己批判からなりたっているが、『対話』では、その公平な地点での自己観察をうしなっている。あきらかに狂った思い込みとみられる「敵」への反撃が、書き手への共感を読者から遠ざけ、彼を狂気の孤独のなかにとじこめる。

晩年

彼の最後の友人コランセの証言としてスタロバンスキーが引いている。「彼は椅子の上で振り向き、腕を持たれの上に伸ばしていた。こうして宙ぶらりんになった腕は時計の振子のような加速のついた運動をしていた。（……）彼がこうした姿勢をするのを見ると、私の心は痛んだ。すると、私はとてつもなく常軌を逸した話を予期したのであり、その予想がはずれたりす

ることはい子どもなかったのである」。(『透明と障害』p.三七六)

「ルソー」は植物を採集し、植物についての書簡を書き、植物辞典を企画しているのであるが、彼は内発的にそうした救済行為に頼ったということはできないのだろうか。それは強迫観念に対して、気晴らしを保証し、自然の事物を考察し、それらの構造を観察し、それらに序列を与えることを彼にやらせようとするある種の即席の治療法ではないだろうか。事実ルソーは植物学にある鎮静を見出しているが、そうした救済は断続的かつ不完全なものにとどまっている。妄想の発作の周期的な反復のために比較的短い小康状態しか彼にはゆるぎなかった」。

(同上p.三七七)

散策の折の植物学的観察も、『夢想』にみるように、容易に迫害妄想にきりかわった。

「いつか疑う余地ない怪物として、毒殺者、暗殺者として世間につたえられ、そう信じられることになるうとは？ 道ゆく人があいさつのしるしとして私に唾をはきかけることになろうとは？ (……) 焦燥と憤懣にひどい錯乱状態に陥って、平静にかえるまでには十年の歳月を要した」。(『夢想』一二)

「私は自分の足元に掘られたすべての陥穽に引つかかった。憤懣、激怒、錯乱が私を捉えた。私は方角を失った。頭は混乱し、人々がいつまでも私をつないでおこうとした恐ろしい暗黒の中にあって、私にはもう、行く手を照らしてくれる火影も、

そこにしっかりとつかまって、自分を引きずっていく絶望感に抵抗することができるような支えも手掛かりも認められなかった」。(『夢想』一三〇)

それは狂気なのか、迫害妄想なのかさだかではなかった。

「熱に浮かされた妄想」 同上

「私をとてつもない変人や狂人のように思わせる原因となった」。(p.五五)

「この時、私の頭がどこまで狂っていたか」 同

「引きこもりがちになった私は、退屈ではなく憂鬱にとりつかれた。ふさぎの虫が情熱にとってかわった。悩ましが悲哀となった。何でもないことにためいきをつき、泣いた。楽しむ間もなく生命が逃げ去るのを感じた」。(『告白』p.二二一)

「犠牲者と刑の執行人のあいだに、尋常ならざるアンチテーゼをうちたてることによって、ジャン・ジャックに苦悶から自己を解放する道を提供している」。ルセルクルp.七〇

狂気

彼の晩年は迫害妄想とのたたかいだったが、壮年期には狂気の一つの偏執観念だった。

「私の狂気から引き出された最上のもの」(『告白』p.四三九)

「善への愛が、この狂気を転じて」 同

有益なものにしたのだ。それが『新エロイズ』である。そのころは、ウドト夫人に対する恋に燃え上がっており、彼の心も外へむかっていた。ただ、彼女は彼の狂気を共有する気はなく、彼の恋を狂気としてあわれんだ。

「彼女は私の狂気をあわれんだ」。p四四五

そしてそこから「恢復させようとし」た。

彼の振る舞いは往々にして狂気じみていた。ジュネーヴに入ったとき、彼は感激して大地に接吻した。

「御者は驚いて私を狂人だとおもった」。p六〇〇

その大本には「暗闇恐怖症」があった。

「私の生まれつきの傾向は暗闇を恐れるのであり、その暗い影を恐れ憎むのであって、秘密というものは常に私を不安にするのである」。p五七八

それに肉体的な病気も彼をさいなんだ。

「その冬の間はほとんど休む暇もない苦悩のうちに過ごした。肉体的な病気にさらに無数の不安が加わって、苦悩をいっそうはげしくした」。p五七六

それは不安だけではなく、現実の苦難のように彼はうけとった。

「嵐に先立つ遠い叫び声がかきこえはじめていた。そして多少でも見通しのきくすべての人々は、私の書物とわたしについて

何かある陰謀がたくらまれ、やがてそれが爆発するであろうということをはっきりと感じていた」。p五八八

陰謀

「私はそれがドルバック党の発明で、私をおびやかし逃げ出させようとするためのものであることをうたがわなかった」。

p五八九

「すべてそれらの底には何か私に知らせたくない秘密があることをはっきりとかんじた私は、この事件にあたっての自分の公正と無罪とに心を安んじて静かにその結果を待ち受けていた。そして私の行く手にどんな迫害が待ち受けていようと、真理のために苦難を受ける光榮ある道に召されていることを、身にすぎるさいわいとしていた」。p五九二

迫害妄想を彼は、想像力のせいとした。

「私の残酷な想像力は、絶えず取り越し苦労をして、まだ存在しない不幸を予見する」。p五九八

「心は嘆きにしめつけられ、魂は憂いに沈み、想像は脅かされ、身を取りまくかずかずの恐ろしい秘密に頭が混乱している今日、老齢と苦悩とのために一切の機能が衰弱してその力をうしなってしまった今日」、「夢想」p五〇

「魂を高揚させ強固にするような逆境もあるが、反対にそれ

を押し殺してしまう逆境もある。私がくるしめられているのはこれだ。私の魂のうちに少しでも何か悪質な酵母があったとしたら、逆境はそれを激しく発酵させ、私を狂躁病患者者にしてしまったにちがいない。『夢想』p100

「私は迫害者たちに迫って彼らと対決しようとした」。同。

このような彼についてフレデリック・グロは『創造と狂気』、(法政大学出版局、二〇一四)でいう。「せいぜいのところ心気症(ヒポコンドリー)の被害妄想患者」。p104。しかし、陰謀についての確信は断固たるものだった。

「自分の運命を襲ったあらゆる災厄が、ごく少数の人々が極秘裏に長い時間をかけて練り上げた陰謀の結実であり、これら少数の人々は何らかの方法で陰謀の遂行に必要なあらゆる人員を次々に引き込んできたのだ、と信じています」。『対話』二p130

「彼は理性だけに動かされる限りは臆病で柔弱なのに、何かの情熱にかき立てられるや火の玉と化するのです」。対話二、p170 全集三、p197九

そのようなときは狂気ともみなされるほどの激情をあらわした。

「熱烈で激しい気性なので」、p120

「将来の不確かさと積もる不幸の経験のせいで、彼は待ち受ける禍の数々に極度におびえ、それを避ける方法を考えるのに

頭がいっぱいになります」。p121

逃亡先のイギリスでも彼は平安ではなかった。

「私の迫害者とその友人たちの意図は私から大陸との一切の交流を奪い去り、私をこの地で苦しみと悲惨さによって滅ぼそうとするように思われる」。書簡。スタロバンスキーp256

「彼らは彼に対して周りにうかがい知れない暗黒の壁を築き、生者の間で彼を生きながらにして埋葬してしまった」。同p349、『対話』p706

「こうした顔と壁の背後には、被告の弁明を聴くことなしに破廉恥な評決をくだした法廷の黒い悪意が隠されている」。同p355

彼が書くものが奪われ、改ざんされるという妄想もあった。

「ジャン＝ジャックは一ページの原稿を書くとすぐに、その原稿は彼の知らないままに途中で奪われ、改ざんされ、手を加えられ、削除された版として発表されるか、あるいは単に抹殺されるであろうことを確信している」。同p357

そのために彼は書き下ろした原稿(『対話』)を印刷に付す前にノートルダム祭壇にささげようとした。その企ては祭壇の周りに柵がめぐらされていてできなかったが、もちろん彼はそれを彼の企てを妨げるために特別にたてられたものと解釈しただろう。

そのような障害だけではなく、書くこと、そしてそれを出版することにも障害があった。公開の席で読み上げることすら禁じられた。それらの困難を排除して書いたのが『対話』だが、これくらい読むのが苦痛であるようなテキストはめずらしい。

これを書くために、彼はルソーという人物と、作者であるジャン・ジャックを別々の人物として造形し、フランス人を対話者を選んでゐる。そして第三者の公平な視点からジャン・ジャック問題をとりあげるのだが、その試みは成功しているとはいいがたい。「フランス人」が、世論を代表しているような設定だが、どうしてもそこには迫害者の偏見がはいりこむ。ルソーがジャン・ジャックを擁護するはずだが、「公平な視点」という観念にさまたげられて、十分な弁護にならないのだ。という以上、この「ジャン・ジャック問題」を取り上げるや否や、彼の文体は硬直し、怒りに捕らえられて、盲目になる。書くことで興奮するのだ。そしてそれがせん妄をうみ、彼の思い込みが確信にかわってしまう。

書くことではなく、散策することによって彼の精神はかるやかになり、甘美な回想にふけることができたことは『孤独な散歩者の夢想』にみられるとおりだが、それでも、現実の迫害に思いがおよぶと、ドルバック、ディドロ、ダランベール、と彼の「敵」の名前がうかびあがってくる。『夢想』も十章を書いただけで未完でおわってしまう。書くことによる不安や苦悩

からの解放はかなえられず、『対話』の不毛なくりかえしに陥ってしまう。あるいは音楽なら彼に愉悦をもたらしたかもしれないが、この頃の彼は音楽を捨てて顧みなかった⁽⁷⁾。

彼の死がみずからえらんだものであるという「伝説」は多分に事実を含んでいるのではないかとさえおもわれるのである。

少なくとも『対話』は、偏執狂をめぐる告発と弁明の輪にとじこめられた出口のないやりとりのくりかえしで、回復の兆しはないとみなさざるをえない。彼に必要だったのは、せん妄を書き連ねることではなく、『新エロイズ』のようなフィクションを構築して、人物たちを動かし、その結果をみることであったのではないだろうか。

註

- (1) 『ルソー、ジャン・ジャックを裁く』ルソー全集第三巻、小西嘉幸訳、白水社、一九七九。なお『告白』は井上究一郎訳、河出書房新社、一九六四、『孤独な散歩者の夢想』は、今野一雄訳、岩波書店、一九六〇によった。訳に疑義があるところは *oeuvre complète de Rousseau, au Seuil, 1967* によって確認した。『新エロイズ』『エミール』は岩波文庫版によったが、引用はしていない。『対話』は全集版によった。

- (2) クレッチュマー 天才の心理学、岩波書店、一九五三 彼は言う。

「彼の天才性と精神病との関連の最も深い根底は、すべての過感の人の場合と同じく、自己の罪業感の中に秘められてあった」。

p. 二二一

「ルソーの罪業感はその源を彼の体験の中に発し、そうして彼の体験はその素質の奥深くにある欲動の矛盾に端を発している」。

p. 二二三。具体的な「罪」は主人のリボンをかすめ取って、その罪をマリオンという召使になすりつけたリボン事件と、友人とともに旅をしているときに、友人が癲癇の発作を起こして倒れたのを見て、逃げ出してしまったことくらいである。

彼の症状については「重い精神病的追跡妄想」 p. 一七と言っている。

- (3) ロンブプロオゾオ 天才論、改造社、一九三〇「絶えず、迫害の偏狂に罹っている間に彼は『ルソー、ジャン・ジャックを裁く』を書いた。彼は無数の敵を減ずるためにその書物の中に幻覚を精密に忠実に描写している」 p. 一五六

- (4) 『透明と障害』 p. 三三五

- (5) この間の事情については、踊共二は「忘れられたマイノリティ」(山川出版社、二〇一六)で、「改宗者援助組織による周到な手引きがあった」ものと推測している。 p. 一一五

- (6) 全集第一巻 p. 一一〇

- (7) 『告白』第二部で書かれたところは、肺炎になって寝ていても作曲をしていた。「熱に浮かされながら、私は独唱部も、二重唱部も、合唱部までも、作曲して行っった」。 p. 一九二「音楽は生涯を通じ

て彼の心を慰藉するものであった」。(海老沢敏)

参考文献

- ピエール・ジャネ 被害妄想、みすず書房、二〇一〇
 ビンスワンガー 妄想、みすず書房、一九九〇
 ランゲ・アイヒバウム 天才、みすず書房、二〇〇〇
 ロンブプロオゾオ 天才論、改造社、一九三〇
 クレッチュマー 天才の心理学、岩波書店、一九五三
 ヤスパース、ストリンダベリとヴァン・ゴッホ、理想社、一九八〇
 スタロパンスキー、ルソー 透明と障害、みすず書房、一九七三
 桑瀬章二郎、嘘の思想家ルソー、岩波書店、二〇一五
 ルセルクル、ルソーの世界、法政大学出版局、一九九三
 フレデリック・グロ 創造と狂気、法政大学出版局、二〇一四
 グレトウイゼン、ジャン・ジャック・ルソー、法政大学出版局、一九

七八

- スタロパンスキー、病の内なる治療薬、法政大学出版局、一九九三
 桑原武夫ほか、ルソー研究、岩波書店、一九六八
 作田啓一 ジャン・ジャック ルソー、人文書院、一九八〇
 マルセル・レモン ルソー、国文社、一九九〇
 海老沢敏 ジャン・ジャック・ルソーと音楽、ペリカン社、二〇二二
 踊共二、閑哲行、忘れられたマイノリティ、山川出版社、二〇一六
 Jean Jacques Rousseau, Œuvres complètes, au Seuil, 1968

(しのだ
ちわき／フランス文学・比較神話学)